

病態・疾患学

[講義] 第2学年 前期 必修 1単位

《履修上の留意事項》本講義では、e-learning教材を活用する。履修にあたり、以下の受講形式と場所の指定を厳守すること。

1. 授業形式について

初回および8・9回目、13回目、15回目は、対面授業を行う。
それ以外の回は、e-learningによる講義視聴となる。

2. 受講場所について

e-learning講義の回についても、自宅受講ではなく大学に来て受講することを必須とする。また個別での受講となるので、パソコンにイヤホンで講義を受講する。イヤホンの持参を忘れないこと。スマートフォンやタブレットでの受講は認めない。
(学内の指定教室及び学内ネットワーク環境下で受講すること。)

《担当者名》 塚本 容子(デ) yokot88@hoku-iryo-u.ac.jp
幸村 近(医) ckohmura@hoku-iryo-u.ac.jp

【概要】

本講義は、人体の正常な機能が破綻した状態である「疾患(病態)」のメカニズムを深く理解し、看護実践において「何を、なぜ観察すべきか」という判断の根拠を修得することを目的とする。各臓器(循環器、呼吸器、脳神経、消化器、腎・泌尿器、内分泌、免疫、など)の主要疾患について、その成り立ちから生じる症状や身体変化を論理的に結びつける学修を行う。単なる知識の暗記にとどまらず、患者の身体に起きている現象を病態生理学的に解釈し、必要な観察項目やケアの優先順位を導き出すための「臨床推論(クリニカル・リーズニング)」の基礎を養う。

【学修目標】

1. 病態生理に基づく「観察ポイント」とその「根拠」の理解

- 各疾患において、臓器の機能障害がどのようなメカニズムで自覚症状(痛み、呼吸困難など)や他覚所見(検査値、画像、身体徴候)を引き起こすのかを説明できる。
- 病態のメカニズムに基づき、看護師として「具体的に身体のどこを観察すべきか(観察項目)」とその「理由(なぜその症状が出るのか)」を説明できる。

2. 疾患の進行度と緊急性の兆候(危険なサイン)の理解

- 急性期(ショック、呼吸不全など)において、生命の危機を示唆する徴候(レッドフラッグ)がなぜ現れるのかを理解し、緊急対応が必要な状態を知識として識別できる。
- 慢性期において、病状の悪化や合併症の出現を早期に発見するために、日々の観察で注意すべき身体変化を理解できる。

3. 治療(薬物・手術)が身体に及ぼす影響と観察点の理解

- 主な治療法(ステロイド、化学療法、手術など)が身体に与える侵襲や副作用のメカニズムを理解する。
- 治療に伴って予測されるリスク(易感染性、機能障害など)に対し、予防や早期発見のために観察すべきポイントを説明できる。

4. 病態からケアを導き出す思考プロセスの習得

- 学習した病態生理の知識を統合し、事例(ケーススタディ)において「現在、患者の体内で何が起きているか」を解釈できる。その解釈に基づき、観察すべき項目の抽出や、ケアの優先度(まずは何をすべきか)を判断する思考過程を説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	【対面講義】 病態・疾患学オリエンテーションと 病態生理の考え方	人体の正常な機能(生理学)と、それが破綻した状態(病態)の関連性を理解し、疾患がなぜ起こるのか、そのメカニズムを看護師として学ぶ意義を学修する。 ・生理学と病態生理学の違いを説明できる。 ・恒常性(ホメオスタシス)とその破綻について概説できる。 ・症状(Sign/Symptoms)が、体のどのような反応から生じているか、そのプロセスの重要性を理解する。 ・本講義の学習方法(e-learningと対面授業の連携)を理解し、学内での受講ルールを遵守できる。	塚本
2	【e-learning】 ライフサイクルと病期(ステージ) から捉える病態	発達段階と疾病・障害の基本的特徴 ・小児期・成人期・老年期における身体機能の違いと病態について説明できる。 回復過程(病期)の基本的特徴 ・疾病の経過(トラジェクトリ)と身体反応について説明できる。	塚本

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
3	【e-learning】 呼吸不全の病態生理と呼吸管理	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸不全の定義と分類について説明できる。 ガス交換障害のメカニズムと症状について説明できる。 	塚本
4	【e-learning】 脳神経機能の局在と脳卒中の病態生理	<ul style="list-style-type: none"> 脳・神経系の解剖生理から、フィジカルアセスメントへつなげるポイントを理解できる。 脳梗塞・脳出血・くも膜下出血の病態の違いと特徴的な初期症状（FASTなど）を説明できる 	塚本
5	【e-learning】 疾患を診断するための画像診断（放射線を用いた）の基礎知識	<ul style="list-style-type: none"> 画像検査のモダリティとリスク管理を含めた看護の役割を説明できる 前回の講義で学修した脳卒中の判断のための頭部CTの評価について理解できる 	塚本
6	【e-learning】 悪性腫瘍（がん）の病態生理と治療・回復過程	<ul style="list-style-type: none"> がんの生物学的特性と進展について、説明できる。 がんの治療と回復過程・緩和ケアについて、説明できる。 	塚本
7	【e-learning】 消化器系の機能障害と急性腹症・肝不全	<ul style="list-style-type: none"> 消化管の解剖生理と消化管出血について説明できる。 肝・胆・膵の機能と障害について、説明できる。 	塚本
8	【対面講義】 循環器系の構造・機能と心疾患	<ul style="list-style-type: none"> 心臓のポンプ機能と全身循環の仕組みから、主要な疾患の発生機序を説明できる。 	幸村
9	【対面講義】 循環器系の構造・機能と心疾患	<ul style="list-style-type: none"> 虚血性心疾患、心不全、致死性不整脈の病態生理と、そこから生じる代表的な症状（徴候）を関連付けられる。 生命に関わる緊急性の高い病態（ACS、大動脈解離など）の特徴を理解する 	幸村
10	【e-learning】 腎・泌尿器系の機能低下	<ul style="list-style-type: none"> 体液・電解質の調節機能と、その破綻による生理学的変化（脱水・浮腫など）について、説明できる。 腎・尿路系の主要疾患（結石、前立腺肥大症など）の病態と症状について、説明できる。 尿量や尿性状（血尿など）の異常と、それが示す病態の関連について、説明できる。 	塚本
11	【e-learning】 血液の成分・機能と造血器疾患	<ul style="list-style-type: none"> 赤血球と貧血の病態を説明できる 白血球・血小板の異常と病態を説明できる 	塚本
12	【e-learning】 代謝機能の障害と糖尿病・脂質異常症	<ul style="list-style-type: none"> 糖尿病の病態について説明できる。 糖尿病の診断について理解できる 糖尿病の合併症からアセスメントまで説明できる 糖尿病の治療について説明できる 脂質代謝異常の機序及び合併症について説明できる 	塚本
13	【対面講義】 免疫機能の異常とアレルギー・膠原病	<ul style="list-style-type: none"> 自然免疫と獲得免疫の違いを理解し、生体防御の全体像（二段構えの仕組み）を説明できる。 液性免疫（抗体）と細胞性免疫（T細胞）の役割を区別し、ワクチンやアレルギーの仕組みと関連付けて説明できる。 主要な免疫グロブリン（IgG, IgM, IgA, IgE）の特徴を述べ、感染の時期やアレルギー反応との関係を説明できる。 	塚本
14	【e-learning】 感染症と炎症の病態生理	<ol style="list-style-type: none"> 「局所の感染（炎症）」と「全身性の感染（敗血症）」の違いを、バイタルサイン（発熱・血圧・呼吸数・意識）の変化を用いて説明できる。 医療関連感染（院内感染）の代表的な原因菌（MRSAなど）を挙げ、その発生要因（抗菌薬の適正使用・易感染状態）について説明できる。 感染症の重症度に応じた観察ポイント（発赤の範囲拡大、疼痛の増強など）を理解する。 	塚本

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
15	【対面講義】 事例で紐解く「症状」と「病態」の つながり	・具体的な臨床事例を通じ、これまで学んだ各臓器・ 領域の知識（呼吸、循環、代謝、感染など）を統合し て理解できる。 ・「症状」や「検査値の異常」から、体内で起きている 「病態生理学的変化」を論理的に推論できる。	塚本

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学環、学校の授業実施方針による

【アクティブ・ラーニング】

導入している

【評価方法】

【評価方法】

1. 定期試験（80％）：

全講義終了後に筆記試験を行う。出題内容は配布するStudy Guideに基づき、基礎知識の定着と臨床判断能力を問う。

2. 毎回の授業後の課題（20％）：

毎回課される課題（小テスト、ワークシート、e-learning等）の提出状況と内容により評価する。

【教科書】

看護のための臨床病態学改訂第5版・浅野嘉延 他・南山堂（成人病態と臨床実践 ・ ・ でも使用します）

【参考書】

「病気がみえる」シリーズ（メディックメディア）

【備考】

Google classroomにて、理解を促すための、文献や資料をアップする。また事前の課題や授業後の課題をGoogle Classroomにて提出するようにする。

【学修の準備】

「病態・疾患学」は看護学の中でも特に学習量が多く、難易度も高い科目となる。今後の基盤となる学修内容であるので、確実に予習・復習を行い、自身の知識を整理し、知識を定着させること。（予習復習各1時間）

【予習】

授業の進行を円滑にし、理解を深めるため、該当する領域の基礎知識（解剖・生理）を整理しておくこと。専門基礎科目で使用したテキストや自身のノートを活用し、用語の意味や臓器の位置・役割などを再確認してくること。

なお、単元によっては別途、事前課題（e-learningやワークシート等）を指定する場合があるため、指示に従い確実に実施して授業に臨むこと。

【復習】

授業で取り上げた疾患の病態生理を、自身の言葉で他者に説明できるようにまとめること。

単なる暗記ではなく、「臨床現場で患者を見るために必要な知識」として、観察ポイントやケアの根拠と関連付けて整理すること。別途、e-learningを課することもある。

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

DP2：看護専門職に必要な知識・技術を修得し、健康や生活に関する問題に対して、適切かつ柔軟に判断し解決できる学術的・実践的能力を身につけている。

【実務経験】

塚本：看護師及びFamily Nurse Practitioner（米国）

幸村：臨床検査専門医、総合内科専門医、循環器専門医

【実務経験を活かした教育内容】

塚本：看護師及びFamily Nurse Practitioner としての臨床経験に基づき、単なる疾患知識の暗記ではなく、症状や検査データから病態を論理的に導き出す「臨床推論（Clinical Reasoning）」を重視した教育を行う。

幸村：循環器・臨床検査専門医として、心臓の構造・機能と心不全の病態を医学的に紐解く。検査データの解釈を通じ、根拠に基づいた看護実践につなげる力を育成する

【その他】

(2026年度・看護福祉学部)

この科目は主要授業科目に設定している